

ユスト高山右近の生涯と信仰

99

金沢から長崎へ

金沢からの出立前、高山右近はすでに病床の前田利長に代わって領主になっていた、弟の前田利常に、その年の俸禄として与えられた黄金60枚を返還しました。もはや奉公できない身となつた以上、受け取るわけにはいかないと、思いからでした。また、高岡にいる利長には長年の恩義に感謝するため、秘蔵の茶器を届けさせましたが、利長は受け取ろうとはしませんでした。キリシタン武士や友人たちに見送られ、右近と内藤如安の家族が金沢を出発したのは、慶長19(1614)年2月25日のことでした。右近62歳、すでに病を得ていました。

が命令に反し、武力で事を起こすかもしれないと警戒し、街のいたるところに警備を置きました。それを知った右近は「神のために追放されるのに、今さら刃向い、復讐するのには、キリシタンの道に反します。キリシタンは人を打ち砕く武器ではなく、自分に打ち勝つ心の武器を用いるようにと教えられています」と人を遣わして、利常に伝えました。利常は、街の警戒を解き、城から出て右近一行を見送りました。冬の厳しい旅を気遣い、利常は馬と駕籠も用意しましたが、右近は断りました。

京都を目指しての旅は、過酷でした。北陸の険しい山路は深い雪にうずもれていました。少しでも足を滑らせると深い谷底に滑り落ちてしまいそうな危険な道を、苦労しながら越えてゆきました。右近はキリストに倣って、徒歩でこの苦難の道を先頭に立つて歩き続けました。このような苦難の旅に慣れない家族もよく耐えました。

旅の途中、眠る場所も食事も凍えるような寒さとの戦いでした。運が良ければ無人の宿で、宿にたどり着けない場合は、雪を掘ってその穴に身をうずめるようにして仮眠を取りました。食事、戦の時のように干飯や梅干し、わずかな干物で空腹をしのぎました。金沢を出て10日ほどで、右近一行は琵琶湖畔の坂本に到着しました。到着の知らせを受けた京都所司代、板倉勝重は、右近が都に入ればキリシタンの間に感動を呼び起こし、暴動が起ることを恐れ、一行を坂本にとどめ、家康からの指示を待つことにしました。

家康がどのような命令を下すのか、右近はいくつか予想していました。一つはこのまま全員を坂本で処刑すること。二つには、駿府か江戸に連れてゆき、見せしめとして市中を引き回し、処刑すること。三つには、家族全員をバラバラに引き離して各地に送り、そこで信仰を捨てさせようとする

こと。右近も如安も三つ目の処遇をいちばん恐れ、家族みんなでどんなに責められても、信仰を支えに生きてゆくことを誓い合いました。坂本で軟禁状態になつて30日後、家康は、男はすべて長崎へ追放、女は希望するなら京都に留まってよいとの命令を下しました。家族全員が長崎へ追放されることを希望したので、都を避けて大坂から船で長崎へと運ばれました。長崎で一行は、大きな尊敬をもって歓迎されました。

「カテキズムの学び」

第31回「殺してはならない」(後半)

十戒の第5の掟である「殺してはならない」の後半は、人間の尊厳の尊重、平和の擁護というテーマでした。講座の様子は下のQRコードから視聴できます。質疑応答では、死者の埋葬に関する教会の教えについて質問がありました。

遺体の取り扱い、復活の信仰と希望を抱きながら、尊敬と愛をもってなされるべきです。……教会は、それが身体の復活信仰への疑いを表すものでない限り、火葬をゆるしています。(2300~2301番)

火葬に関しては、2016年10月25日に教理省が「死者の埋葬および火葬の場合の遺灰の保管に関する指針」という新たな文書を発表しています(邦訳は中央協議会HPにあり)。ここでは、遺灰を「墓地や他の神聖な場所に埋葬することは、洗礼によって聖霊の神殿となり、『聖霊が多くの善いわざを行うために道具や器として大切に用いた』信者の遺体に対するふさわしい哀悼と尊敬の念に適切に応えることとなります」とし、「遺灰を空中、地上、水中、もしくはその他の方法で撒くことは許されません。同じように、思い出の遺品、装身具、その他の物の中に保管することは許されません」ともしています。また、「遺灰を家族成員の異なる世帯の間で分け合うことはできません」とも述べています。しかしながら日本には分骨の長い文化があり、カトリック信者の中には異宗婚など家族親族の間で宗教が違っても少なくありませんので、即禁止というのはそぐわないと考えられます。

この点をクラスで述べたところ、オンラインのチャットで次のような質問が入りました。「分骨はNGとは言いますが、聖人たちの遺物は世界中に分骨されていますが……? それはOKなのでしょうか?」鋭い質問! 結果論ですが、聖人たちの遺体が分散されたのは、身体の復活信仰への疑いを表すためでも尊敬を欠いたためでもなく、聖人への崇敬の熱意と取り次ぎを求める信仰があふれ出た(?)結果と言えるのではないのでしょうか。

(文 酒井俊弘補佐司教)



YouTube動画視聴

大阪教区司祭

アウグスティヌス 三竹洋一神父(84歳)帰天



三竹洋一神父は、2021年11月28日(日)、老衰のため、仁豊野ヴィラで帰天。多くの小教区で司牧に務め、晩年も宣教の使命を全うできるように常に心掛けておられた。

【略歴】 1937年9月11日、東京都生まれ。65年3月、司祭叙階。同年から75年まで阿倍野、玉造、関目、夙川で助任。75年〜78年、(旧)泉尾で主任。78年〜82年、米国ウェストン神学大学院留学。帰国後、住之江、豊中、香里、玉造、夙川で奉仕。2006年〜11年、東京教区真生会館に派遣、関口教会協力。11年〜13年、教区発行「聲」編集長等担当。13年、鈴蘭台主任。13年〜19年、司教館に居住し、16年〜17年、玉造で奉仕。19年以降、仁豊野ヴィラ居住。

「生きる」―難民移住者

求められるのは物わりの良さではなく公正さ

路頭に迷った難民移住者を保護する運動に長年携わってきましたが、保護施設内でのトラブルはつきもので、時に暴力沙汰に発展することもあります。

ある夜、シエルタ1の難民から入居者たちが大喧嘩をしていてと一報が入りました。私はタクシーを拾ってすつ飛んで行きました。そのシエルタ1には国籍も背景事情も異なる男性たちが住んでおり、文化摩擦を避けるために生活上の緩やかなルールを設けていますが、人が集まれば争いが起こるの



また別の日には、シナ

ピスの事務所で難民移住者たちが奉仕活動をしていて、あることがきっかけで諍いが起こりました。

勢いで私は飛ばされまして。あわや警察沙汰になるところでしたが、長老的存在の難民が収めてくれました。

経緯を聞いた私は一人を追いつ判断をしました。男性6人のいる作業場に入って問題行動を起こした人に出ていくよう私は高圧的に命令しました。逆上した男性は至近距離から私に罵詈雑言を浴びせかけてきました。私が平然と追い出しにかかると、相手はマスクを外し、差別主義者だ偽善者だと喚き散らし、私に侮蔑の言葉を浴びせたその瞬間、別の男性が彼の胸倉を掴み、殴りかかろうとして、全員が突進して乱闘寸前となり、その

「傾聴が大事だ。高圧的で命令口調とは何と浅はかな」と言う人もあるでしょう。それは時場合と相手によるのです。人としてやつちやアカンことはアカン、許さない、と示す役、そして皆の怒りを引き取って叱りつける役が必要だったので、当事者たちが責任者に求めるのは「物わりの良い人」ではなく「毅然とした態度で筋を通す人」です。嫌われても公正である人かどうかを見ているのです。

(文 シナピス事務局)

ピスカルド篤子

カトリック墓地 納骨堂・納骨所 使用者募集

大阪教区の信者の方のみがお申込みいただけます。詳細は資料をお送りさせていただくほか、インターネットでもご覧になれます。

資料請求やお問い合わせは 教区本部事務局 管理課 竹中まで 06-6941-9705



大阪教区のカトリック病院 ガラシア病院

特徴的な医療 ホスピス(緩和ケア) リハビリ・神経内科 肝臓内科・循環器内科

医療法人ガラシア会 理事長 前田万葉 大司教 チャプレン 松本信愛 神父

〒562-8567 箕面市栗生間谷西 6-14-1 ☎072-729-2345

医療法人ガラシア会

